

陳述書

子どもの頃に中国からの引揚げを体験し、圧倒的な飢餓感を味わった日本人の一人として、お米を代表格とする食料のことについては、どうしても一消費者として以上に関心を寄せている。

そんな中、そのコメどころのメッカともいべき新潟で、地元の方々を不安たらしめる屋外実験が行なわれそうになっており、それを思いとどまってもらうための裁判が存在することを知り、微力ながらも一助になればと参加させていただいている。

ところが遺伝子組み換え作物の屋外実験は、その実態を知れば知る程、僕が当初考えていた一時的な食の安全にとどまらず、耐性菌発現という取り返しのつかない事態のきっかけともなりかねない、自然界に対する重大な脅威を含んだ大きな問題だったのだ。

裁判になっている今、こんな身も蓋もない事を言うのは憚られるが、この種の問題は、裁判で結論を出してもらう性質のものではないと思う。

訴訟中の今でも、実験の実施そのものをご再考頂き、是非和解に向けた歩み寄りをいただけるよう、被告の皆さんに切に願う。

僕は、地球の片隅に共存させてもらっている一生物として、人間はもっともつと自然界に対して畏敬の念を抱き、謙虚になって欲しいと思っているのだ。

平成 21 年 12 月 22 日

